

今月のエキゾチック症例(第23回 2026年7月)

鳥類の卵巢/卵管腺癌

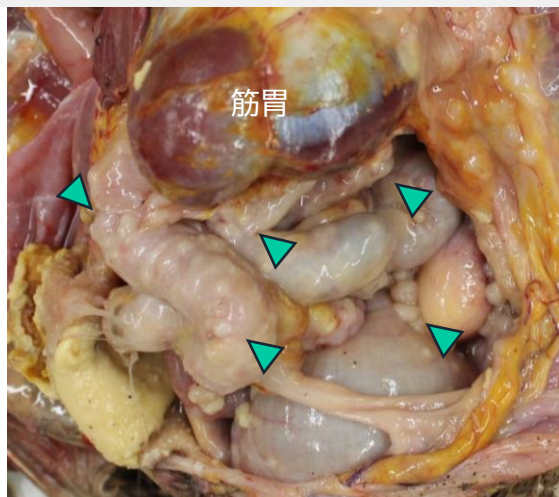


図 1. ニワトリ, 体腔内多発性腫瘍, 肉眼写真.
腸管や腸腹膜腔漿膜面において、無数の小型白色～乳白色腫瘍(矢頭)を認める(癌腫症)。

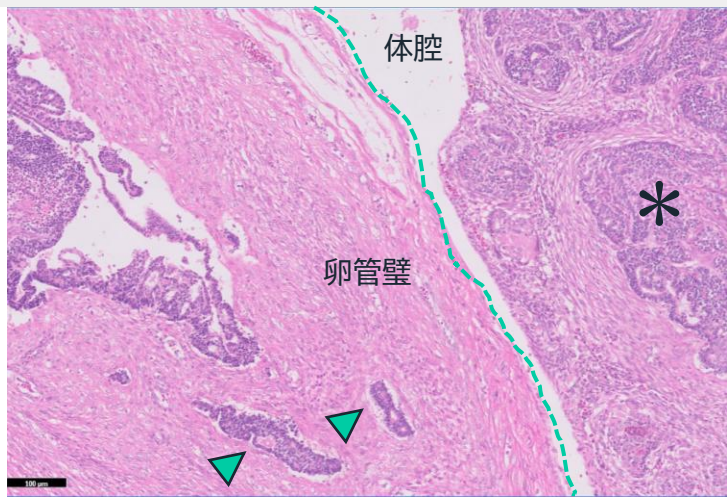


図 2. セキセイインコ, 卵管/体腔内腫瘍, 低倍図.
卵管壁に対し浸潤性(矢頭)を示す上皮性腫瘍細胞が見られる。体腔内にも同様の腫瘍細胞(*)の増殖による腫瘍形成が見られる。緑点線は卵管漿膜面を示す。

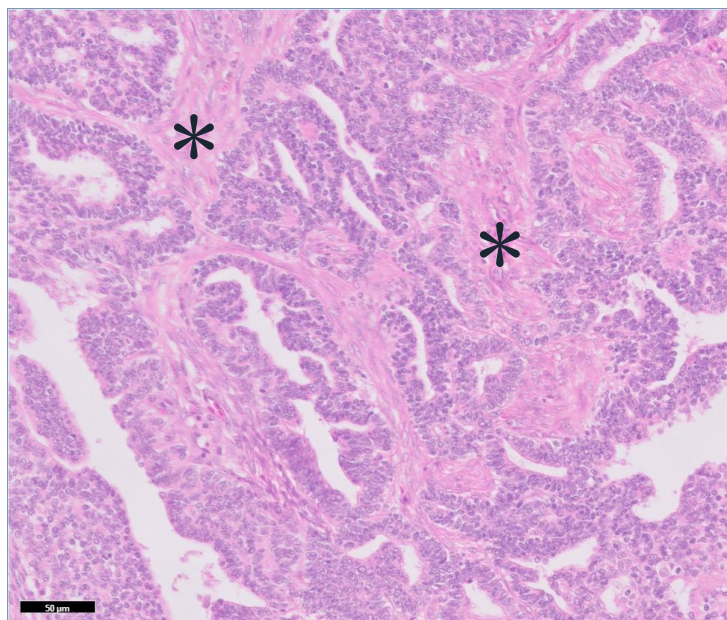


図 3. セキセイインコ, 卵管/体腔内腫瘍, 高倍図.
立方形～円柱状上皮細胞が、少量の間質(*)を伴い乳頭状～管状に増殖する。腫瘍細胞の異型性は中等度で、有糸分裂像が散見される。

消化管、脾臓、生殖器、脾臓、腹気嚢が含まれる鳥類の腸腹膜腔からは、様々な組織に由来する上皮性腫瘍が発生します。その中でも卵巢/卵管由来の腺癌は発生率が高く、高齢の鳥類(鶏では2歳以上)に多く見られます。腸腹膜腔からは他に消化管、脾臓、気嚢由来の腺癌が発生します。

腸腹膜腔に発生する腺癌の多くは、肺・肝臓への転移や漿膜面播種(癌腫症)を起こし(図1)、体重減少、腹部膨満、腹水貯留などの臨床症状を伴います。多くの症例は発見時に癌腫症を起こしており、難治性を示します。

これらの腺癌の多くは乳頭状、管状、腺房状増殖を示し、組織学的形態が類似しています(図2,3)。特に卵巢/卵管由来の腺癌は、いずれも卵白を構成するオボアルブミンを産生するため、組織学的検索のみでは区別が難しいことも多いです。そのため、進行した腺癌の正確な由来の特定には肉眼的な腫瘍の発生部位を踏まえた総合的な判断が必要になります。

執筆者からの一言

鳥類の卵巢/卵管腺癌は剖検症例で多く見られ、疾患の難治性が反映されているように感じます。レジデント時代に、米国で年間約300件ペットとして飼育されている鶏の剖検をしていましたが、卵管/卵巢由来の腺癌は卵黄性/卵材性体腔炎やマレック病に次いで多い疾患だったと記憶しています(米国では個人飼育の鶏へのマレック病ワクチン接種は義務ではありません)。余談ですが、以前よりも鳥類の症例が増えてきたように感じ、とても嬉しく思っています！

無断での転用/転載は禁止します。



執筆: 平島 瑞希
DVM, PhD, DACVP,
DJCVF

参考文献

1. Pathology of pet and aviary birds. 2024. Wiley Blackwell.
2. Harris EA et al., Avian Dis. 2014 Mar;58(1):95-101.